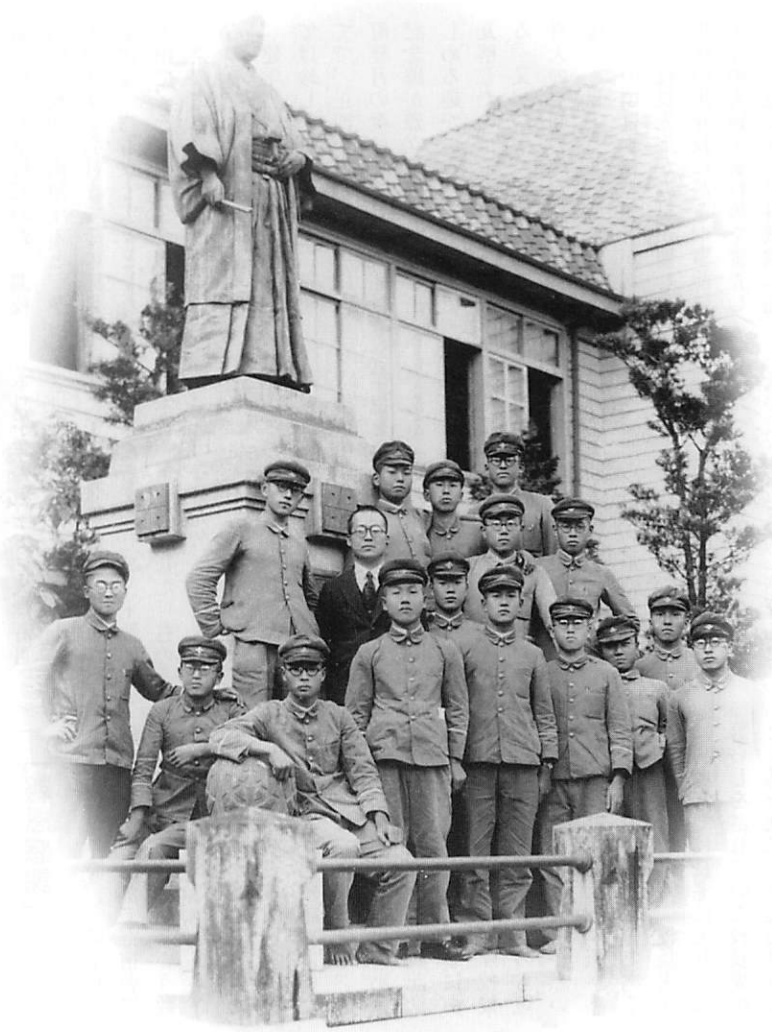


向陽

〒780-8041 高知市塩屋崎町1丁目1-10 TEL(0888)33-4394 FAX(0888)33-7373 <http://www.inforyoma.or.jp/tosako/>

建学八十年を迎えて



旧制土佐中学校の正面玄関左手にあった川崎幾三郎翁像を囲んで、中澤薫先生とその教え子たち。(昭和十五年)
同窓会では創立八〇周年記念出版として「薫先生―向陽の窓辺に遺されたもの」を企画しております。(巻末頁に紹介)

母校よ永劫に生きよ

芝 純 (第7回生)

建学の由来

大正九(一九二〇)年創立の旧制土佐中学校(現土佐高校)は今年創立八十周年を迎える。存立が果卵の危機を経てよくぞ生き延びたと建学以来を知る者には感慨無量である。

由来土佐は維新の際、薩長土と並称せられて人材を多く輩出したが、爾来教育振るわず、人材漸く凋落せんとした秋、高知の人、川崎幾三郎、宇田友四郎二氏大いに慨ずる所あり、巨費を投じて土佐中学校(旧制)を創立、大正九年四月十六日、帯屋町川崎氏控家で授業開始、十二月二十七日、筆山の麓の現在校地を購入して校舎を建て、越えて十一年四月八日授業開始、十一月十八日校舎落成式を挙げ、この日を創立記念日とした。

初代校長は長崎県の人、東大文学部哲学科御卒業の三根圓次郎氏。三根先生は当時新潟県立新潟中学校長で夙に教育界に令名高い方だった。当時の新潟県知事は土佐出身の北川信従氏だった。三根先生は此の北川氏の銓衡と推輓で土佐中学校初代校長に迎えられた。

特異な使命

土佐中学校は少数精鋭・英才教育を標榜し南海の一角に彗星の如く出現した特異な使命を担った学校だった。開校当時学校から南望すると、孕のセメント会社までその間目を遮る一物もなく広々とした青田で、その中を北から南へ一条の電車の軌道が走っているのみだった。

建学当時の母校は当時としては珍しい瀟洒な木造二階建てで、正門を入ると右手に大町桂月の撰になる名文の開校記念碑が聳立していて襟を正しめる趣があったが、戦災で瓦解したのは遺憾の極みである。又、左手には川崎翁の等身大の温顔の像が訪う人々を優しく見下ろしていた。

その頃は本校志願者があると、校長先生か教員が親しく生徒の出身校に赴き、事前に生徒の人物・素行等を審査しだつてメンタルテストを行い、その後一両日学科試験を実施した。

私は此の学校の存在を大正十三年、新聞で初めて知った。予科一、二年・本科五年の二

部編制だった。予科を終了して本科一年といっしょになった。英語の教師にブレイディという愛嬌溢れる米人が居て珍しかった。私は大正十四年本科一年の入学で、入学許可者は十二名だった。この十二名に予科二年を終了して上がつて来た者を合して三十数名の本科一年を構成した。右の十二名のうち九名は既に逝去。一名は生死不明。確実に生きているのは二名。うたた今昔の感に堪えない。

土佐中学校が初めて四年修了生を出したのは大正十三年である。この頃高知に官立旧制高知高等学校が新設されて未だ日が浅かった。当時高校は四年修了者にも受験資格を与えていたので、土佐中学は早速第一回生に高知高校を受験させたら、その年の文科・理科の主席合格者は、文科・理科共土佐中学四年修了者だった。更に翌年、二回生のM氏が天下の最難関一高理乙に挑戦したら幸い、首尾よく合格。土佐中学は順風満帆、幸先よい船出だった。

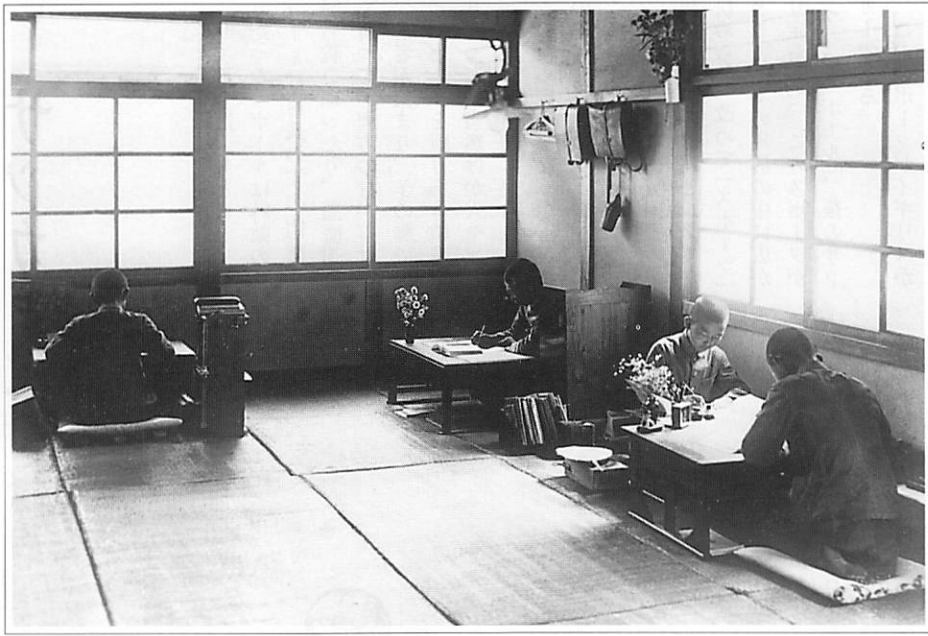
旧制高校は敗戦でGHQによつて廃止されたが、それまで土佐中学から一高に入学者

を十八名出している。これを見ても土佐中学が如何に優秀な学校だったかを証して余りあるものであろう。心強い限りであった。

「報恩感謝」

私は低学年時、一時下宿生活をしたが、やがて寄宿舎に入った。大野倉之助という数学の先生が舎監だったが、奇矯に富み話題が多く名舎監だった。その頃寮の図書室にあった浩瀚な「向陵誌」にいたく觸発されて感銘を受け、生涯の進路を確立した思い出は懐かしい。又在学中開校記念日には師弟打ち揃つて孕にある川崎翁の墓参をし、帰校後紅白の祝菓子を頂いたのも幾星霜を経た今日尚楽しい思い出である。「校是」の「報恩感謝」を地で行つたものである。

私は五年生の時、校長先生に請われて校長宅に入り一人暮らしをされていた校長先生と生活を共にし大変お世話になった大恩がある。当時母校には門谷という給仕がいて絵をよくした。京都の絵の学校に学び、後年門谷南嶺という画家になったが、給仕時代に画いた条幅を校長邸の応接間



寄宿舍「向陽寮」の学習室で、黙学時間の様子。
(写真提供/17回生・山内 猛)

に掲げてあったのを思い出す。三根校長は多年眼疾で苦難の生涯を送られたが、昭和十年一夜配属将校と激論せられ、翌日脳溢血で殉職された。真に痛恨の至り、お気の毒の極みであった。

東京府立第一中学校長に土佐出身の川田正激という方がいて全国中学校長会長の要職に居られたが、三根校長はその副会長で、生前大変人魂だった。又、川田先生の後任の西村先生とも親交があり、「君・僕」の打ち解けた仲だった。又先生は東京に御帰宅中は、よく一高や東大を訪れて教え子の動静を確認していた。お目のご不自由な先生と歩く時には先生と歩調を合わせた。東京駅など階段の数を言上したら、先生はとくに知悉しておられた。

時代を超えて

三根先生の後任には愛知一中の校長だった青木勘先生が来任され、多難な戦時中、守城に徹せられたのは特に印象が深い。私は高射砲兵として応召する直前、母校に青木先生を訪ねてお暇乞いをした時、先生から特に懇切丁寧な有難

いお話を戴いた感激を今に忘れ得ない。

昭和二十年七月四日三代校長大島光次先生の時、母校は戦火で全校舎悉く烏有に帰し、生徒は高知市内外の小・中学校で分散授業、あわや廃校寸前で、大島先生の復興への大苦心・大活動は筆舌に尽くし難く、万難を排して完遂されたその大業は土佐校の存する限り不滅である。

大島先生の時、旧制中学は新制高校となり、新たに新制中学を併設し、更に中・高とも男女共学とし、中高の収容人員も増し、オペリスク型だった学校は、今や卒業生一万六千二百名を擁するピラミッド型の巨大な磐石の学園と変貌した。今や卒業生は全国に雄飛して建学の精神を遺憾なく発揮しつつある。いつの同窓会だったか、演壇に衆参両議院の議員五人の同窓生がスクラムを組んでいて豪勢だった。初代三根先生在天の霊もどんなにか喜ばれた事かと歓喜に堪えなかった。

今の輪奐の美を誇る学校建築は四代曾我部清澄校長時代の建造である。五代校長は松浦勲先生だが、曾我部先生と

共に母校の出身者であるのは何となく親しみがあって有難く心強い。松浦先生が卒業生として母校の為、粉骨碎身されたお姿はただただ感激あるのみである。

六代の現校長森田幸雄先生は少子化時代の至難な私学の経営に腐心していられる事は、現に日常見聞きしている事である。斯くして母校は未来永劫に隆々たる歩みを続けている。

「文武両道」

最後に特筆すべき一事がある。それは昭和二十八年、土佐高野球部が創部四年にして高知県代表となり、甲子園に初陣し、松山商と対戦、覇を争い、準優勝となった事である。全国高校野球部選手権大会五十年史に「今年優勝校が二つ出来てめでたい。優勝旗を持ったチームと持たないもう一つの学校がある。」と誌されて絶賛を博した。世に進学のみ、またスポーツのみで傑出した学校は多い。土佐高の「文武両道」は異例に属する。母校よ永劫に生きよ。イギリスのイトトン・ハロー両校のごとくに。

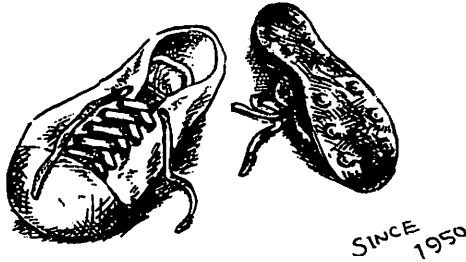
土佐高校サッカー部50周年

サッカーは「祭り」だ

サッカーは、もともとまつりだった。ボールは外敵の首、ゴールは村長の家の門構え。勝ち戦を願ったり、悪魔退散を祈って、両方の村から村境に若者が集まり、羊の腸で作ったボールを蹴りあう喧嘩祭りだった。当然けが人や死人がでた。家や畑も荒らされた。このため幾度となく国王がこの祭りに禁止令を出したが、この祭りはやまらなかった。このため祭りは、国王の権限で、広さと時間とルールが決められ、改めて「スポーツ」として人々の生活の中に広がり定着した。このスポーツが「フッチ・ボール」、後のサッカーである。

蹴球部

ムの何人かのこともたちによつてである。野球全盛の時代、この子どもたちは何を考えたのかサッカーを始めた。以来五〇年、土佐高校のサッカー部はその年その年、忘れ得ぬ物語をつくりながら今日まで



きた。

サッカー部ができた昭和二五年の冬、彼らは初めて合宿をした。

部が正式に認められてからは、せまい学校のグラウンドで野球部と争いながらの練習を続けていた彼らは、広いグラ

ンドと指導者がほしかつた。そのため、秋の運動会でドーナツを売って費用をつくった。そして訪ねたのは、佐川高校だった。そこには、当時高知県サッカー協会の藤田氏がいた。彼は東京教育大サ

サッカー部の出身で、最新型のサッカーの技術を持っていた。高知県にサッカーを普及したいと願う良き指導者であった。またコーチ役を買ってでたのは池川町出身で後に東京教育大（筑波大）に進んだ追手前高校の成田十次郎少年だった。この少年は、後にドイツに留学しクラマー氏に出会った。そして世界のサッカーを日本に紹介し、日本のサッカーを大きく発展させることになる。この二人の指導者とともにサッカーに明け暮れた一週間の時間は、若者たちに何を教えたのだろうか。合宿に参加したOBたちは当時を振り返って、「この合宿で生まれたチーム・ワーク、仲間意識、それがその後の土佐高校のサッカーの基礎をつくったのではないかと思う」と話している。

そして優勝メンバーの中で高知に残った連中が、その後の土佐高校のサッカーに大きな影響を及ぼし続けている。OB会の会長門那国雄はG K、副会長の松田憲典はC F、中塚頼彦はR I、小島一郎はC Hなどの面々である。戦後のブラック時代の若者たちは、自分たちの力で、新しい時代を自分たちのものにする独創性を持っていたようだ。その伝統が、今も我がサッカー部に生きずいっているように思えてならない。31回生中塚頼彦はサッカー部四〇年誌の中で次のように書いている。「ブラックの校舎でした。校庭（グラウンド）ではありません）では沢山のクラブが、芋の子を洗うように練習をしていました。昭和二五年（一九五〇）ピカピカの中学一年生当時のことです。五月のある日の放課後、ボール遊びを眺めていたら、仲間からはぐれたボールが転がってきました。蹴り返してやったら、今度はわざと転がしてきました。また蹴り返しま

(5) サッカ一部50周年

すと、高校生のおんちゃんかニコニコしながら寄ってきて、「こっちへ来て蹴ってみや」と木の杵（ゴールポスト）の前に連れていかれました。前から横から、右や左からボールを転がして「あの杵に蹴り込んでみや」と言います。「こういう蹴り方できるかえ」と、今で言うトラッピングシユートもやらされました。

練習も終わり部室に案内されました。いや、連れて行かれました。この部屋たるやものすごいもので、まるでバラツクの倉庫の中の石灰置き場の片隅、静かに歩かんと真つ白いほこりが舞うという場所でした。そこで「サッカー部へ入りや」この一言で決まっしてしまいました。そのあと、「一心」で素うどんをご馳走になるに及んでは、一宿一飯の恩義ここに尽き、今に至る我がサッカー人生のキックオフとなりました。」

あの日から五〇年、休みなくグラウンドでの練習が続けられている。

それは、サッカーが素晴らしいスポーツだから？ サッカーが素晴らしい友達をあた

えてくれるから？

その繰り返しの中から、部ができて四八年目の去年、土佐高校サッカー部は夢にまで見た全国高校サッカー選手権大会に出場する事になった。部員僅かに一五名。三年生

四名、二年生二名、一年生九名の部員数での全国大会出場は、この大会がはじまって以来、土佐高校が初めてのことでなかったろうか。昭和二九年第一回西日本サッカー選手権大会に出場した時の部員数も一一名だった。まことに土佐高校らしい形で、またサッカー部の歴史が前に進んだ。

特に三年生の頑張りは価値が高い。学問とスポーツの両立を伝統とする土佐高校にあって、彼らの頑張りは在校生や校友また我々OBにとっても誇らしいものであった。二月三十一日、千葉市陸上競技場に応援のため集まってくれた東京在住の校友たちは、今青春のまつただ中を行



く一五名の若者たちの姿をまのあたりにみて、学問、礼節、そして健康でスポーツを愛するとういういわゆる文武両道の懐かしい「土佐高校の合言葉」を思い出すことができたのではなかっただろうか。そ

して、二〇〇〇年を明日にしたその日、我々も共に校歌と応援歌を大きな声で力いっぱい歌うことができたのではないだろうか。改めて74年生の頑張りに、心から感謝の言葉を贈ります。

ここで忘れてはならない人のことを思い出した。それは、竹田弘毅さんのことです。竹田さんはすでに故人となっています。土佐高校サッカー部のときの合言葉は二度ありました。昭和三〇年から二年間と昭和三八年から六年間の二度、外部からの指導者ととして手弁当で土佐高校のサッカーとつき合ってくれている。

27回生
後列=池淳一郎 山本喜三郎 宇賀辰郎 今村祐二 安藤正介 嶋崎泰輔
前列=松岡美喜夫 山本英喜 安孫子友行 大野一郎 西村退介

「最初は高知県サッカー協会の要請で、二度目はOBからの依頼を受けて土佐高校にお邪魔をしたわけですが、振り返ってみますと、二度とも素晴らしい選手に恵まれ、活気のある練習、試合ができたと思います。生徒のみなさんには、良いクラブを作れ、技術のしっかりした選手になれ、自分をコントロールしなさいと言いました。みなさんはよく理解して、中学、高校とも優勝という成果を手に入れました。私はただグラウンド

にたつてみなさんを見守っていただけのようだったと思います。」

この文章はサッカー部四〇年誌に残されている竹田さんの思い出です。彼は何故か「土佐」の子供たちが好きでした。そのことは彼の指導を受けた誰もが感じたことでしょう。彼の住んでいた日高村での合宿に参加したものは誰もが、そのことを感じる事ができたとと思います。

私たちはこの五〇年、沢山の良き指導者に恵まれて部活動を続けることができました。そしてその中で、少年たちは、自主的に、自発的にそれぞれの情熱をむき出しにしてボールを追った。その日々の蓄積は、少年時代の良き思い出として胸に刻まれ、今を生きる糧となっている。サッカーは「祭り」。しかし、この「祭り」の物語は、今も生き生きと時間を超えて新しい。

土佐高校の八〇年を、サッカー部五〇年の歩みの中から、思いを込めて、お祝い申し上げます。（土佐高校サッカー部OB会）

創立80周年を迎えて

80周年記念行事実行委員会

した。

一九二〇（大正九）年、社会に貢献する人材育成を建学の精神に創立された本校は、今年八〇周年を迎えました。これを機に、あらためてこれまでの本校の歴史を振り返るとともに、やがて来る一〇〇周年を見据えた本校教育のさらなる充実発展の糧とするために、八〇周年を記念するさまざまな記念行事・記念事業（下段）を計画しています。

四月二日には吹奏楽部による記念コンサートが行われました。また、五月一日には観音寺中央高校（香川県）と片島中学校（宿毛市）を迎えて招待野球が行われました。開会セレモニーで、長年土佐高校野球部監督として指導にあたられた籠尾良雄元監督に学校長より感謝状が贈られます。

また、記念事業の一つである「八〇周年記念誌」は、(1)「四〇周年記念誌」に掲載されている「学校史」を補充し、さらにそれ以降の記録類のまとめを付加すること、(2)将来のより完全な「学校史」の編纂にむけて、現時点で可能な限りの資料の収集・整理の体制を開始しておくこと、(3)それらを通じて、本校のこれまでの教育活動の点検・反省と、将来の発展に資すること、等を主な目的に企画・編集作業を進めています。

「記念誌」は、大まかな内容として①祝辞（式典）、②学校史（収集資料をもとに年表を作成）、③アルバム（冒頭グラビア一六頁のほか、白黒写真を適宜該当箇所に挿入する）、④クラブ活動史（運動部は県体を中心に一年一頁で年表と各部の原稿・写真を集録、文化部は原稿・写真を中心に集録）、⑤特集Ⅰ「これからの土佐校」、⑥特集Ⅱ「土佐校と女性」、⑦資料で構成し、B五判・約四〇〇頁程度を予定しています。特集Ⅰでは、校務分掌上の各部長に本校の現状を踏まえ

て将来の展望を書いてもらう（「校内の眼」と同時に、様々な分野で活躍中の同窓生に、「土佐校時代に何を考え、何を学び、そのことが人生にどのように関わってきたか、すなわち、卒業生にとつて土佐校は何であったか」ということを本音で語っていただき、土佐校の今後の在り方についてのご提言をいただく（「校外の眼」）予定です。

特集Ⅱでは、女性の社会進出が顕著な今日の状況を踏まえ、戦後、全国にさがけて「男女共学」を採用した土佐校の先進的な流れを継承・発展させるためにも、女性の同窓生に「女性の学び方・生き方」等につき、後輩たちに役立つような内容を示していただく準備を進めています。

なお、資料の収集は今回の「記念誌」のみならず、将来の「学校史」編纂のためにも今後継続してゆかねばなりません。校内に資料室をかまえ、資料の収集・整理・保管・利用の体制を整えてゆく所存です。同窓生の皆様には、今後とも資料の提供および情報提供にご協力をお願い申し上げます。

土佐中学・高等学校創立80周年記念行事の概要

- コンサート
吹奏楽部
4月22日(土)午後2時
於…県民文化ホール
音楽部 秋
- 招待試合
野球部
5月14日(日)
於…高知市営球場
午前11時～中学
(片島中学と対戦)
午後1時半～高校
(観音寺中央高校と対戦)
バスケット部
8月26・27日(土・日)
於…土佐高校体育館
- 記念講演会
11月16日(木)
於…土佐高校体育館
講師 大原健士郎
演題「土佐人気質」(予定)
- 記念式典および祝賀会
式典 11月17日(金)
午前 時
於…土佐高校体育館
祝賀会 11月17日(金)
- 向陽祭
2月3・4日(土・日)
- 「記念事業・その他」
80周年記念誌発刊
(平成13年1月発行予定)
校史・クラブ活動史・特集Ⅰ「これからの土佐校」・特集Ⅱ「土佐校と女性」
■記念テレビ番組制作
(平成12年11月に2日にかけて放映予定)
RKC制作・生徒制作の2本
■学校紹介ビデオ制作
■文芸部
「筆山」80周年記念号発行
(平成13年1月予定)
■「土佐中高100年を考える会」の立ち上げ
(含新校舎・同窓会館・校地拡張)
■創立80周年記念募金の実施
■教員研修基金の創設
(教育のさらなる充実をめざして)

(7) 母校は今……TOSA NOW……

振興会の現況と活動

会長 国見直樹

今年、平成一二年四月より
振興会執行部の編成変えが行われ、既に子弟が卒業された役員が退任され、現在在校生を持つた親のみで今回の執行部が編成され直しました。北島清彰会長と三人の小谷匡宏、高野嶺子、射手典男副会長、監事二人が総退陣し国見直樹が新会長に互選されました。現振興会役員全員の子弟が在学しておりますので、現在本会のベアレントの会となっております。田村恭昭前々会長、北島前会長のもと振興会活動は、土佐高等学校の進学率向上のため寄与すべく行われて来ましたが、いまだ結果に現れておりません。現在自分達の子供が受験をもう直ぐ控えている我々ですので、活動意識はいやでも高く熱っぽくなる今ですが、その気持ちは学校側にも充分伝わっているものと思われします。今後小学生の数が毎年の様に少数化し学校の選別が厳しくなることは明らかです。「冠する土佐」であり続けるために、より一層の学校側の改革の姿勢を示

すこと、振興会と同窓会が連携を緊密にして学校側を支えることが大切であろうと確信しております。

振興会活動は、執行部に広報、進学、総務の各担当の副会長のもと広報活動、進学講演会が企画され、各月毎に例会が行われ喧々諤々の話し合いがもたれております。また小学校の学区別に支部長、副支部長が選任されて、中学校、各学年担当の先生の出席のもと支部会が開催され、先生と父母の直接接触の場がもたれております。また年二・三回

振興会役員名簿

(平成一二年六月)

- 会長 国見直樹
- 副会長(広報) 杉本雄一
- 副会長(進学) 野崎りつ
- 副会長(総務) 畠山寛
- 監事 毛山章
- 監事 西山忠孝
- 監事 山本志雄
- 評議員 大黒英世
- 評議員 北村惠美子
- 評議員 浦田比奈子
- 評議員 大島仁
- 顧問 小谷匡宏
- 顧問 高野嶺子
- 事務局 千頭裕

支部長会が行われ、執行部、合いの場を持つ様に運営され、各支部長、副支部長と話し ており、より土佐をよくしよ ております。

うとの熱意ある議論が行われ

平成一二年年度 大学入試のまとめ (合格の状況)

医学部合格者

- [国立大] 京都大、大阪大、神戸大、広島大、山口大2、徳島大2、高知医科大9、大分医科大
 [私立大] 自治医科大、順天堂大、東邦大、日本大2、聖マリアンナ医科大、愛知医科大2、藤田保健衛生大2、大阪医科大4、関西医科大3、近畿大2、兵庫医科大2、川崎医科大4、その他] 防衛医科大

公立					公立					私立				
大	学	現	浪	計	大	学	現	浪	計	大	学	現	浪	計
北海道	1	1	2	2	東京都立	2	1	3	1	明治学院	2	2	5	2
北都	2	1	1	2	京都市立	1	1	1	1	立早稲	2	3	26	12
茨城	1	1	1	1	名古屋市立	2	2	2	2	神奈川	1	1	1	1
筑波	1	1	1	1	大阪府立	3	3	3	3	聖マ	1	1	1	1
千代田	1	1	1	1	大分県立	1	1	1	1	フェリス	1	1	1	1
千	1	1	1	1	神奈川県立	1	1	1	1	愛愛中	1	1	1	1
東京	2	4	4	4	名古屋市立	2	2	2	2	藤田	1	1	1	1
東京	1	1	1	1	京都市立	1	1	1	1	京都	1	1	1	1
東京	1	1	1	1	名古屋市立	1	1	1	1	東京	1	1	1	1
東京	1	1	1	1	大阪市立	1	1	1	1	京同	1	1	1	1
東京	1	1	1	1	福井県立	1	1	1	1	同立	2	4	10	4
東京	1	1	1	1	計	17	6	23	18	大	1	1	1	1
大阪	1	1	1	1	昨	13	6	19	17	阪	1	1	1	1
大阪	1	1	1	1	私立					大	1	1	1	1
神	1	1	1	1	自治医	5	1	1	1	大	1	1	1	1
島	1	1	1	1	山	3	3	8	5	大	1	1	1	1
徳	1	1	1	1	細	3	3	3	1	大	1	1	1	1
島	1	1	1	1	慶	11	7	18	11	大	1	1	1	1
山	2	2	2	2	大	1	2	2	2	大	1	1	1	1
口	1	1	1	1	慶	1	2	3	1	大	1	1	1	1
山	1	1	1	1	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
徳	1	1	1	1	慶	1	1	1	1	大	1	1	1	1
島	2	2	2	2	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
香	1	1	1	1	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
愛	2	4	6	6	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
高	22	3	25	22	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
高	3	4	12	12	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
福	1	1	1	1	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
九	3	3	3	2	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
佐	1	1	1	1	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
大	1	1	1	1	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
鹿	2	2	2	2	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
計	92	44	136	124	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1
昨	89	47	136	121	大	1	1	1	1	大	1	1	1	1

高校県体・中学市体での活躍



高校県体

- 陸上… [男子] 学校対抗：1位
 100m：1位・2位/200m：1位・2位
 400m：1位・2位
 110m障害：1位/400m障害：2位
 400mリレー：優勝/800mリレー：優勝
 走り高跳び：3位
 ハンマー投げ：2位・3位
- テニス… [女子] 団体：優勝/個人複：3位/個人単：3位
 [男子] 団体：ベスト4/個人複：3位
- バドミントン… [男子] 団体：2位
 個人複：優勝/個人単：4位
- 弓道… [男子] 団体：2位/個人：優勝
- ハンド… [男子] 3位
- 剣道… [男子] 団体：3位
- サッカー…ベスト4
- 自転車…スプリント：2位/ポイントレース：3位
 オリンピックスプリント：3位/4Km団体追抜：3位
- 野球…2位
- 水泳… [男子] 学校対抗：2位
 50m自：1位/100m自：1位・3位
 200m自：2位/200m個メドレー：2位
 400m個メドレー：2位/400mリレー：2位
 800mリレー：2位
 [女子] 50m自：1位/400m自：1位

中学市体

- バスケット… [男子] ベスト4
 [女子] ベスト4
- バドミントン… [男子] 団体：ベスト4
 個人複：優勝・2位
 [女子] 団体：ベスト4
- ハンドボール… [男子] 2位
- バレーボール… [男子] ベスト4
- 陸上… [男子] 800mリレー：1位
 [女子] 低学年400mリレー：1位



女子テニス部初の全国へ

私達は、今までインターハイを目標とし、自分達のテニスをやり続けてきました。日々の練習は楽しいもので、時間はいつも「あっ」という間に過ぎていきました。顧問の先生方に香川や徳島へ遠征に連れてもらったのも大変いい経験になりました。

私達が優勝できたのは、インターハイへ行くんだ、という自分達の気持ちと、そして何より一生懸命応援してくれたみんなの気持ちのおかげです。みんなの声援にプレッシャーを感じることはなく、とても心強く思えました。コートの中からは見た応援席の風景をこれから先忘れることはありません。

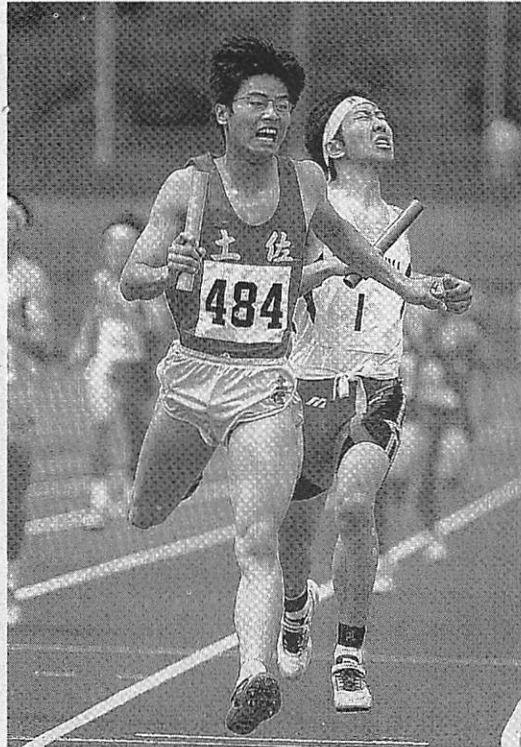
優勝が決まったとき、みんなが一緒に喜んでくれて、一緒に泣いてくれて、それが一番うれしかったです。最高の日でした。

右より

濱崎 絹子
 北村明日菜
 久米先生
 岡部真理子
 相沢 佐恵
 高芝菜穂子

文

武両道



四国高校選手権陸上の男子1600mリレーで3分18秒49の県高校新記録で優勝した土佐のアンカー森本貴昭選手(愛媛県総合運動公園陸上競技場)

土佐1600m県高校新でV

四国高校選手権

期日 最終日

四国高校選手権前大会最終日は十九日、愛媛県総合運動公園陸上競技場ほか陸上とテニスが行われた。県勢は陸上で活躍。男子1600mリレーで土佐(和田、森本雅、東崎、森本貴)が3分18秒49の県高校新記録で優勝した。

同種目の県勢四国制覇は昭和四十一年の安芸以来三十四年ぶり。また女子走り高跳びの沈芸(明德)も1m55を跳び、優勝候補の榊見咲智子(香川・明徳)を抑えて優勝した。同種目の県勢一位は、昭和五十八年の奥田みゆき(高知農大当時)以来で十七年ぶり。このほか男子八百mの奥田真司(追手前)が1分55秒03で二位。女子同種目の徳島(明德)も2分14秒03で二位。女子四百mリレーの明徳(中沢、要飯原、田村、上田)も三位入賞を果たした。

陸上部二年 森本 貴昭

私達、陸上部は今年の四国大会最終日の一六〇〇mリレーで県高校新記録(3分18秒49)で優勝することができました。四〇〇mリレーの方が前評判は高かったのですが、私は出来るものなら、この一六〇〇mリレーでいい記録を出したいと考えていました。大会最後のこの種目は、どの学校も優勝を夢みる高校陸上の華なのに、高知県勢は、どちらかと言えば苦手で、ずっと淋しい思いをしてきたからです。一走和田君が、好スタートをきり、トップ集団の一人として、二走の弟の雅俊にバトンを渡しました。四〇〇mより一〇〇、二〇〇mの得意な弟も、懸命の走りをし、二位で三走東崎君につなぎました。そして、東崎君がものすごいパワーを見せて、一位の優勝候補、小豆島高にピツタリとつき、二位という好順位で私にバトンが渡って来ました。小豆島高のアンカーは私より格上の選手です。でも皆んなの走りを無駄にはできないと、ラスト勝負に期待をかけ、私も必死で追いかけてきました。

ラスト三〇mで抜き一位でフイニッシュをきった時、他のメンバーが飛び出して来て、私達は抱き合って喜び、そして、泣きました。私達の為に最後まで応援してくれていた観客の人達も喜んでくれているのがわかりました。自分で言うのも何ですがリレーは、走っている私達はもちろん見ている人達にも感動を与えるんだと思いました。土佐の陸上部はリレーに重点をおいています、喜びを分かち合える人達がいるのは本当に幸せです。

陸上は個人競技のように思われますが一人じゃいい記録は出ません。私達が多種目に出場できるのも、ひっきりなしにマッサージをしてくれる人、裏方にまわって雑用をこなしてくれる人、応援の声をかけてくれる人、多くの陸上部員の支えがあったからこそです。心から皆んなにありがとうと言いたいと思います。

幸い私達リレーメンバーは全員二年生です。私達には、もっと高い記録に挑戦するだけの時間が残されています。これからもお互い励まし合って、努力を重ね、今年の記録をどんどん塗りかえていきたいと思っています。

向陽寮をなつかしむの記

作曲家 平井康三郎（第5回生）

この文は、土佐中・高新聞部の出身者を中心にした会である「向陽プレスクラブ」が一九五九（昭和三四）年十一月二十日に発行した「向陽クラブ第2号」から再録しました。文字等は原文のままを原則としましたが、一部書き改めた所があることをお断りしておきます。

また、新聞記事は「向陽新聞」（一九五四年二月二〇日発行第二十号）からのものです。
（二〇〇〇年五月十三日、向陽寮同窓会において配布されたものから転載しました。）

静まり返った寄宿舎の窓には十一の部屋から洩れる電燈の明りが向学心をそそのかのように美しくみえた。闇夜に定かではないが校庭にはテニスコートと白線が仄かに白く浮かんでみえた。外は闇、そしてあたり一面の広々とした青田は蛙の聲の交響楽である。これは私が入舎した頃の向陽寮の夜景で、舎内が明るいのに話し声一つきこえないのはこの名物である黙学の時間だからである。

大野先生はこの時間中に舎内を巡視しながら各室で一人一人の生徒から数学の質問をうけられ一々個人的に懇切丁寧に教えて下さるのであった。このようなことは今から思えばまことに勿体ないほど有難いことなのだが当時まだ遊び盛りの下級生たちの中にはこの黙学を迷惑がっていた者も無きにしもあらずで筆者もはじめはまことに苦しかったものである。

しかし環境ほど偉大なものは無い。即ちこの黙学も一年後には完全に板について六時ともなれば自然と部屋の中央に机が並び英、数、国、漢、地、歴、博物等の教科書や辞書が取り揃えられて一日中の最も神聖な業務が始まるのである。

寄宿舎は校地の内部、校舎の北側に建てられ、東向きが玄関を入ると左右に下駄箱があり向って右が閲覧室（？）左が倉務室そして洗面所、風呂場へと続いていたように記憶している。

玄関正面の長い廊下の右側に十一の部屋があり第一室からだんだん奥へと番号がついていた。中央第六室これは私が最初に新入生として入った部屋で思い出はつきない――の処から食堂へと廊下があった。そして便所は第十一室の処――この突当りが修養室（娛樂室）――から右え曲ったところにあり、その外側に倉監先生の御宅が建っていた。

起床――朝礼（点呼）――朝食――登校――下校――夕食――黙学――就床は毎日のコースだったが、この外に掃除、洗たく、風呂の水くみ、炊事当番の仕事などがあり又生徒の理事は日記をつけねばならなかった。

この中で印象に残っているのは炊事係と風呂の水汲みだが炊事場には賄（まかない）のおばさんと家族がいたので当番の仕事は一週間の献立をつくるのと大きな米びつから毎食炊くところの白米と麥を計って賄に渡すことであった。

麦めしは身体によいということであったが実家が米屋で幼時から白米ばかりで育った私にはこの二〇パーセント麦入りの御飯がのどを通らなかつた。

しかし、それもほんの一日か二日ですぐこの麦めしの旨まさが忘れられなくなった。

御飯というものは沢山一時に炊くと特別に美味しいものであの寄宿舎の大釜一杯に炊き上った麦めしの匂いと味は又格別であった。

一汁一菜が原則だったがそれだけに御飯は余ることが殆んどなかった。

しかも舎の食事だけでは足りなかった食い盛りの坊主たちは食間や食後に近所の文房具屋兼駄菓子屋を訪れポケット・マネーで饅頭や生菓子を食ったが、私たち柔道部の暴

ん坊がある日食ったこの間食のレコードが一人でみかん水三十本、餅菓子二十数個だったというからおどろく。

しかもこれでお且不足していたか夜は田舎の親から送って来た餅を焼いて食う始末である。

寄宿舎には各室に室長（最上級生）一名があり新入生はこの室長の命令には絶対服従

ということになっていた。そんなわけで室長さんの顔は大したものであり自宅からいろいろの食物などの差入れがあると先ず室長さんに御試食を願う……そうでないとい就床後にフトンむしにされるという珍景もあつた。

込むのが仲々大変なことでまだ上水道の無かつた市外潮江の里だから手押ポンプで一人何千回と押して水を貯水槽に汲み上げ、これで風呂を沸かしたものである。

勿論これでも当番があつて毎回数名ずつ交代でやつたが仲々の労働であつた。この風呂に最初に入られるのは舎監先生、それから上級生、下級生となる。

こんな時寮生の口から洩れる一フシは彼の第一高等学校の名寮歌「あ、玉杯」であり各大学の校歌などであつた。そのうちわれらが向陽寮にも寮歌がぜひほしいという声が誰からもなく起り、遂に第一回生の先輩、竹内弘氏の手で歌詞ができた。

五ヶ年間の長い寮生活をふり返つていやなことでも多少はあつたにちがいないが今からふり返つてみるとそれらは全部影を消して了い、唯残るは寮生活のよき思い出、楽しかつたことばかりでなつかしさに胸は一杯になるのである。

『櫻歌のつぎは寮を』といふ本紙の題を眺められた先輩から、昔の寮歌が新曲部へ届けられたと聞き、かつて寮生活を送られた先輩諸氏から「ここで寮歌を聴いてみるか」といふ誘ひが、27回生の先輩藤野君(中央大学)らが集まつて、寮歌をたどりながら歌謡を配したこのことを新聞部東京支店を通じて知った先輩作曲、平井隆三(現生協)と、

向陽寮歌発見

先輩平井隆三郎氏處女作

向陽寮々歌 竹内弘・詞 平井隆三・曲



平井先生は洋生活時代から大の音楽好きで、寮では楽器を扱うのである。この曲作以前の第一一人者である平井先生が、ソリ押人の中でハーモニカを吹いて「配音すべき作曲生活への一歩」であつた。

音響好きで、寮では楽器を扱うのである。この曲作以前の第一一人者である平井先生が、ソリ押人の中でハーモニカを吹いて「配音すべき作曲生活への一歩」であつた。

おられる。寮歌の判定にあつては竹内氏が先頭に立つてその必要を力説し、このため寮生一同の熱意により、遂に竹内氏自身、新曲部が外部へもれなき作詞するところとなつたのである。

押人の底指が、
はすれて連綿が
が床下へ落ち
こむよう女房(一)扇影白く桐葉におさる
ぬをせらえ 武蔵別れの園に
たりして、な ますらお我等あいに集りて
みなあ苦心を 向陽の理理片身に響う
れたという逸(二)一よし破の暗雲を覆い
暗も透つてい 奇き来る白濁風に叩かぶる
る。またこの 我等は掲げん真の光
寮歌の歌謡を 明き灯 若き心
作つてた(三)やがて黎明黄金の太陽
つた竹内弘氏 砂丘に燃え出す若き黄金
は、本校第一 向陽 黄金の太陽
同生 同生 黄金の太陽
同生 同生 黄金の太陽
卒業された(四)桐の葉におさる園辺の地に
秘蔵の秘蔵を 我等唱わたすすらすらの歌
のり現在在江 我等の寮よ 黄金の太陽の葉
高々と動きて

中間、世界の暗雲を指し最後は「向陽、向陽、向陽寮よ」若人の気概にみちたこの名詩には私が作曲を担当することになり毎日、毎夜私はこの詩句を手にして校庭や築山の麓を低廻し朗吟、苦吟の末、遂に向陽寮歌を完成したわけである。

この寮歌の発表は果然全寮生の熱烈なる歓呼をもつて迎えられる、事ある毎に愛唱されることとなつたのはまことに嬉しい限りで私がこの寮に残した唯一の貢献であつたといえよう。

「星かげ白く樟葉匂える 建依別(たけよりわけ)の南の国に ますらを我ら相あつまりて 向陽の理想 かつみに誓う」 ……後略……

そして又家をはなれてはじめて親の有難味というものがかつたものである。私にとつてはこの寮での五ヶ年間は自分の一生の中でも最も印象深く忘れ得ない黄金の時であり、若き日の純情の記録であるが、恐らく友人諸兄に於かれても御同様であらうと思います。

まだまだ色々思い出せばつきないものがあるが今日はここで筆をおかせて頂きたいと思ひます。



吹奏学部と共に

松尾 功禄

昭和三十年土佐高校へ赴任すると、すぐさま吹奏学部の顧問を仰せつかった。私が音楽が趣味だと前もって分かっていたからであろう。その当時は、古ぼけた楽器と十名程の部員が毎日放課後、部室前で何か病みついたように思い思いに吹いていた。時折やかましいといわれたりしているのを見たとき、これはあまり歓迎されていないようにも感じた。

やがて高知県吹奏楽連盟が結成され（昭和三十年）、コンクールにも参加出場するようになり、本格的な練習が必要となった。最初は行進曲風な曲が多かったが、次第に芸術的音楽性を要求されるような曲に進展していった。しかしその頃は、どの学校もまだつたない演奏だったが、唯一つ市商だ

けはちがっていた。やはり伝統的に鍛えあげてきただけあって、すぐれた音楽性をもっていた。吹奏楽であれだけのクラシックが演奏できるというのは驚きであった。何でも毎日夜十時頃まで練習していると聞いて、うちも夜八時過ぎまで練習した日もあった。今考えると、無茶苦茶だった。

しかしそのかいあってか、たった一回、コンクール四国大会で、Bの部で優勝（昭和三十八年）したことがあり、一同喜びあふれ意気揚々と帰校したことが思い出される。それから後二、三年、土佐高がコンクールでマークされていたようで、ひそかに優越感を味わっていたが、今思い出しても顔が赤くなる。

部活動の中でも合宿は大きな行事である。

昭和三十六年から始めたが、場所は、閑静な山奥の小学校を利用させてもらった。キャンプも兼ねて楽しいものの一つだった。特に、OBとの交流ができて、学校では得られない雰囲気と多くの収穫がある。これは今後も続いて、より良いものにしていくであろう。

吹奏学部の発展著しい頃、わが校野球部もまた度々甲子園出場という輝かしい力を発揮した。その勢いに乗って吹奏楽部も活動に一段と力が入り、バトンガールを組織して、その都度応援に参加するという幸運に恵まれ、大いに盛り上がった。

しかし、わが部の本命は演奏であり、その実力が最も発揮できるのは、何と云ってもスプリングコンサートであろう。これは殆ど部員の自主性の練り上げた結晶である。第一回目（昭和四十年）のコンサートから、企画、構成、曲目選定など、どこをとってもすばらしいセンスの良さをもっている。今後ますます磨き上げていってほしいと思っている。

最後に私はいつも願っていることだが、わが部は、皆に親しまれ、他に貢献し、すぐれた芸術性と楽しさをつつまでも忘れず、人に安らぎを与える部に発展していつてもらいたいという気持ちでいる。

(二〇〇〇年五月一日)

支部だより

関東支部

幹事長 市川 直介

(53回生)

何よりも、昨年末母校のサッカー部が全国大会に出場しました。たくさんさんのOB・OGが師走の忙しい時期に千葉市のグラウンドに駆けつけ、校歌を歌いドンチャン騒ぎの応援をしました。甲子園でも是非応援したいですね。

五月二七日(土)に、関東支部総会を青少年オリンピックセンターで開催し、全体で約二六〇名が参加しました。日本経済新聞社の論説委員の岡部直明氏が「これからの日本経済」との演題で講演され、古い体質が残る日本経済(日本企業、様々な団体、日本人は、急速なスピードでグロー

バル化・情報化する国際競争社会の中で、進化・チャレンジしなければならぬことを勉強しました。懇親会は、若い七〇回生が司会を担当し、出身小学校別にテーブルに集まったり、クイズをしたり楽しいひとときを過ごしました。

関東支部では、昨年から総会に学校の先生を三名ないし四名招待しています。多くの先生に出席していただくと同窓会も盛り上がります。今年、森本教頭先生のほか西峯先生、小村先生そしてサッカー部監督の渋谷先生に上京していただき、懇親会や二次会で懇親を深めました。若い現役先生も関東支部の総会に出席していただきたいと思えます。

最後に、関東支部の役員の変更がありました。幹事長の溝渕真清氏(三三回生)、会計幹事の山本高敬氏(二五回

生)および吉野保徳氏(三一回生)が顧問に就任され、私こと市川直介が幹事長に、会計幹事に金澤由里さん(五五回生)、監査に吉井雄二氏(四九回生)、森木隆裕氏(五九回生、公認会計士)が就任しました。その他は、宮地支部長、鶴和事務局長を含め再任です。よろしくお願いいたします。

関西支部

「なんぼう」編集局

森岡 周作

(31回生)

我が母校土佐中学校・高等学校は、創立八十周年を迎え二十一世紀へと踏み出すこととなりました。新世紀は、情報社会の中を健康的強靱な身体で奔走する世界で、益々

「文武両道」が求められる時代となり、我が母校出身者が活躍することでしょう。

この二十世紀最後の年は、飛躍の第一歩を踏み出す年として、同窓会全員頑張りましょう。

関西支部のこの一年は、総会を平成十二年一月十五日(土)午後六時半新阪急ホテル二階「星の間」にて開催、出席者百二十余名(来賓七名)最近にしては多数出席者となりました。貴部より岡村甫会長(32回生)のご出席を賜り、当支部永野元玄支部長(29回生)との六大学時代野球リーグ対決の秘話を賜り、又「母校紹介」全国サッカー大会初出場のビデオ上映ありと和気あいあいの中で、三時間余の時間を出席者全員最後まで過ごし、素晴らしい晩餐会となりました。

次に、当支部情報誌「なんぼう」(第二十号)も平成十一年十二月発行、今回は元のモノクロ印刷となりましたが、ページ増刷(8ページ)により、一層の情報内容を充実しました。内容は、平成十一年五月一日開通の「しまなみ海道記」(58回生高橋修二記)

の自転車渡り初めに続き、「石鎚山登山の思い出」(32回生田井慎吾記)などと、学校だより・本部支部便りも盛り沢山の情報にて発刊致しました。

幹事も約四十名となり、平成十一年度五回の幹事会を開催、各回最低一名以上の幹事を確保することを目標としました。

その上、当支部事務局移転と事務局長31回生木下章夫氏より46回生中山真知子さんへ改新致しました。

2000年土佐中・高等学校同窓会 関西支部総会



そして、電子メールの当支部ホームページも兵庫県在住の41回生杉本隆雄氏により開局され、44回生鈴木(旧姓阪崎)孝史氏が今後運用予定となっております。

(URLは <http://www.com-net.or.jp/tosa/>)

最後に、当支部会計監査31回生中塚頼彦社長による高知木材出荷増大の一環として、土佐産商(株)大阪 事務所土佐道路直サテライトセンターの今秋(十月)オープン予定となっております。(大阪府豊中市新千里北町)

参考として、高知県大阪事務所が、四国銀行大阪支店内へ移転(平成十二年七月)の予定です。

東海支部

事務局長 南 毅一

(37回生)

新発見、クジラの味と

土佐の白線

昨年のお話にどうしてもなりません。そう、ドラゴンズの久

しぶりの優勝に沸いた秋でした。名古屋の街々は活気にアフレておりました。その素晴らしい平成一年をしめくくべしで、わが土佐高同窓生二〇余名が忘年会と称し、土佐料理「ねぼけ」名古屋店へ突撃しました。平成一年二月五日(日)のお昼のことでした。イヤードの顔もニコニコとテカテカとふくよかでした。

土佐を離れてウン一〇年、故郷の味と香りは忘れていませんでした。サケとアユが生まれた河川に「もんで」くるように……、土佐人の我々には、結局、チクワやウルメに土佐の冷酒でないとダメなんですヨ、なんてしたり顔の「モガリ」同志が杯を交わしました。へてから、ホントにめずらしくクジラを食べました。何と言いますかホラ、牛肉の代用品としてのクジラのイメージしか残っていない世代に生まれたせいとか、恐る恐るでしたが、アンタ、これが又オイシかった。ハリハリ鍋と言わらしいのですが……、クジラへの評価が一変し、ヘロヘロに酔っぱらった日曜日



の平和な昼下がりでした。さて、平成二二年の五月に

広島支部

支部長 沖 修一

(40回生)

生より、「土佐高の袖の白線のルーツ」はこの名古屋にあるらしいから調べてくれぬかという、思いがけぬ、依頼を受けました。胸をワクワクさせ、早速、動きました。ナント……新発見です。詳細は同窓会の八〇年記念誌に掲載されるでしょう。お楽しみに……。

は、支部総会も恒例の如く開きました。三〇数名のこじんまりした会合でしたが、学校・同窓会本部・各支部からも遠路ご参集いただき中味の濃い総会となりました。ありがとございました。話題はやはり「土佐高の復活」であり、「昔は良かった土佐高」ではコマルの激論でありました。尚、この熱気はそのまま夜のネオン街に延長、多々の改革案が出ました。活かしたものです。それから学校の浜田教頭先

平成一一年度の広島支部の活動報告をさせていただきます。一月一三日に盛大に行われました広島支部総会では広島支部名誉会員であり、元検事、現在東京で弁護士として活躍中の竹村照雄先生(20回生)を講師としてお招きして、「竹村先輩大いに語る」というタイトルで御講演をいただきました。法廷および弁護士活動の思い深いお話をさせていただきました。感謝を受けました。広島支部総会に御臨席を賜りました土佐中・高等学校の先生、本部をはじめ各支部代表の方々には篤く御礼を申し上げます。また本総会で長年同窓会広島支部長として御活躍をいただきました岡村進介支部長(30回生)が勇退され顧問へ就任が決定し、新支部長として沖修一(40回生)が選出されました。これからも宜しく御願い致します。

九月一三日には念願でありました広島支部の名簿の更新を行いました。広島支部では広島県、山口県、島根県、鳥取県、同窓生の名簿を作成しています。従来はワードプロセッサで入力されていた住所録を、ある程度データベースとして検索でき、またマッキントッシュでもウインドウズでも使用できるように、他の住所録などのデータベースに容易に取り込み可能なように、多くの方々が使用しています。エクセルのデータとして作成致しました。前記四県の電子メールアドレスをお持ちの方にはインターネットで住所録を配布致しました。支店経済が中心の広島では転勤に伴う転入・転出が多く、広島支部でも名簿の管理には頭を痛めております。本年(平成二二年)には関東支部より本年度

(15) 支部だより

皆様が広島支部総会出席を口

の土佐高卒業生の中で中国地区の大学に進学した人達のリストを送っていただき大変助かりました。名簿作成の大きな助けになると思います。
本部総会をはじめ各支部総会には広島支部からも参加させていただき誠に有り難うございます。広島支部では役員ばかりではなく役員以外の会員が各支部総会に参加させていただくのも良いのではないかと考えております。高校時代の友人と一献酌み交わしながら話をしますと、時間がフラッシュバックされて青春時代に帰り大いに活力を得るような気がします。広島支部では従来一月に行っておりまして、平成一二年から一月に行うことと致しました。この理由は一月は雪のために交通が麻痺してしまうことがあり、御出席をいただいた方々に多大な迷惑をかけることがあるからです。一月は暑くも寒くもなく、広島名物の牡蠣には少し早いかもしれませんが、宮島の紅葉が最も美しくなり厳島神社の朱色の鳥居が青い瀬戸内海に映える季節です、同窓会の

実に広島へ来られますことを広島支部会員一同心待ちにしております。

香川支部

幹事長 宮地 正隆 (36回生)

香川支部では、この七月一日に毎年恒例の総会・懇親会を、JR高松駅前のホテルニューフロンティアで開催致しました。当日は、母校から土居徹先生をはじめ、同窓会本部ならびに他支部からも御臨席を賜りまして誠にありがとうございました。おかげさまで、9回生から75回生まで、総勢五〇名の幅広い年齢層の方々に参加していただき、盛大な総会を開催することができました。

今回の総会では、かねてより懸案であった支部名簿が、同窓会本部の多大なご支援によりやっとなし、皆さんに配布することができました。大久保副会長をはじめ御協力頂きました皆様には、心よりお礼申し上げます。また、平成一二年年度の役員

改選では、本会の一層の充実を図るため、発足当初の体制を見直し、事務局を新たに設置することになりました。それに伴い、幹事長を私、宮地が、また事務局長をこれまで幹事長でした武山が務めさせていただくことになりましたので、どうぞよろしくお願いいたします。新しい支部役員は次のとおりです。

- 支部長 土田哲也 (32回)
- 幹事長 宮地正隆 (36回)
- 幹事 中澤正良 (38回)
- 熊野貴磨 (40回)
- 萩野友康 (44回)
- 廣田昭夫 (56回)
- 会計監査山中敏弘 (47回)
- 事務局長武山正人 (40回)
- 事務局 森本和典 (53回)
- 野村喜久 (54回)
- 寺田裕二 (62回)

ところで、四国は、今年三月一日の徳島自動車道井川池田―川之江東間の完成により、四国都が「X字形」に高速道（通称エックスハイウェイ）で結ばれたことは既に存じのことと思います。

今回の開通を機に、高知と高松の間はさらに近くさらに便利になり、四国エリア内の交流がますます活性化すること



とでしよう。また三本の本四架橋と高速道が一体化すること、近畿、中国とのダイナミックな経済・文化圏が形成されることを我々も期待しています。ただ、その一方で高松が「四国の玄関口」から「ただの一通過点」になってしまうことも心配されています。高知近郊の皆さん、四国外にお住まいの皆さん、帰省や旅行の際には、高速道を利用してぜひ一度瀬戸の都、讃岐高松

にお越し下さい。

では、最後になりましたが、母校ならびに同窓会員の皆様のご発展とご健勝をお祈り申し上げ、香川支部からの近況報告とさせていただきます。

一九九九年度 物故者名簿

(二〇〇〇年七月一日現在)

- 平 11・4・7 千頭 孝明 (31 O)
- 籠尾 豪夫 (29 H)
- 11・5・24 田島 陸夫 (35 S)
- 11・3・30 高井 茂 (40 K)
- 11・8・2 宮内 巖 (39 H)
- 11・8・1 安芸 修 (1)
- 11・8・30 須藤 洋三 (24)
- 11・10・17 葛目 尚宏 (13)
- 12・1・19 原山 三津 (38 O)
- 12・1 宮脇 裕明 (48 T)
- 12・3・2 窪添 滋 (25)
- 12・3・5 山本 雅昭 (23)
- 12・4・12 寺尾 叔己 (15)
- 12・5・8 小松 榮 (28 L)
- 12・6・27 北村 嘉道 (35 K)
- 11・5・13 岡部 緑 (旧職員)
- 12・5・28 益弘陽一郎 (旧職員)

本部活動報告

●一九九九年総会

一九九九年八月七日(土)
高知新阪急ホテルにおいて、新卒74回生を含む多数の同窓生が出席して、総会、記念講演会ならびに懇親会が盛大に開催されました。

総会では、本部ならびに関東・関西・東海・広島・香川各支部の活動報告のち、収支決算・予算が承認されたほか、会則を改正(役員の人数を変更)した後、役員の改選が行われました。新役員は次の各氏です。(敬称略)

- 会長 岡村 甫 (32回)
- 副会長 浅井 伴泰 (30回)
- 同 大久保浩二 (32回)
- 同 森木 房恵 (39回)
- 同 川崎 康正 (42回)
- 幹事長 岡内 紀雄 (34回)
- 副幹事長 永野 和宏 (34回)
- 同 横田 整二 (40回)
- 同 岡田 容典 (47回)
- 同 西山 彰一 (48回)
- 会計 千頭 裕 (58回)
- 会計監査 森木 将雄 (32回)
- 同 田中 章夫 (40回)

記念講演は、20回生・元広島高検検事長で弁護士・相模女子大学理事長の竹村照雄氏による「土佐人への回帰」というテーマで、このテーマは

「土佐に生まれて、土佐の大地(父母の眠るところ)に帰る」ということから、「コンプレックスを持つことは決して悪いことではない。それをバネにして向上を図ることが大切である。」ことなど、氏の生い立ちから今に至る、人格の形成に影響を与えた幾つかのエレメントについて、大変興味深く、一本筋のお話した土佐人らしいお話をさせていただきました。

懇親会では、森田校長をはじめ多数の懐かしい先生方を交えて、ソフトボール部球友会の元氣あふれる司会進行のもと、新旧同袍盃を交わしつつ、思い出話に花を咲かせ、応援歌を合唱、岡村会長ならびに母校にエールをおくりお聞きとなりました。

●会員名簿

五年毎に改訂している同窓会会員名簿の二〇〇〇年版は問もなく発行いたします。各

回、各ホームの幹事さんをはじめ会員のみなさんには、調査ならびに広告の募集、掲載に多大にご協力をいただき誠にありがとうございました。



●母校八〇周年

我等が母校土佐高校は、今年創立八〇周年を迎え、一月一七日の記念式典を中心とするさまざまな行事に加え、記念誌の発行や教員研修基金の創設などの記念行事が予定されています。我々同窓会としても、母校のより充実した教育と更なる発展を願い、協力、支援してまいりたいと考えます。

80周年記念Tシャツ



胸の模様は、13世紀イタリアの数学者・フィボッチの有名な数列(第3項以降が常に前2項の和となつて増えつづける)をデザイン化したものです。創立以来、伝統を積み上げながら今日を迎えた土佐校の、更なる発展に思いを馳せながら、多くの同級生にこのTシャツを着ていただきたいと思ひます。(税込二、〇〇〇円/申込みは稲門スポーツへ)

編集後記

二〇〇〇年は土佐高校建学八〇年を迎える記念の年となりました。同窓会名簿発行作業も大詰めを迎えております。忙中、向陽三号も会員の皆様や先生方のご協力で、無事お届けすることができたことになりました。

長く暑い土佐の夏がやってきましたが、体調を万全に、八月の総会には、ぜひとも多くの方のご出席をお待ちしております。冷えたビールと共に、新旧集い合いまししょう。(副会長 大久保浩二)

創立八〇周年記念出版のお知らせ



薫先生

―向陽の窓辺に遺されたもの―

坂本隆先生/著
四六判・一五〇頁

本書は、旧制土佐中学校で歴史と地理を担当し、生徒たちに広く慕われた博愛・熱情の先生……中澤薫先生の書き遺された手紙を軸にして、現・地歴、社会科教諭の坂本隆先生が著した力作です。

昭和十七年七月、薫先生は中国大陸に出征し、二〇〇一年一月、故郷・高知に無言の帰還をされました。そのほぼ二年の間に戦地から送られてきた手紙は、家族や教え子たちへの深い愛情に溢れています。

薫先生が戦場にあっても、土佐の教育者として最期まで伝えようとしたものはなんだったのでしょうか。教育の荒廃、人としての自然の情愛の欠如が問われている現代において、薫先生と教え子たちの往復書簡は我々の世代にも、なにかを語りかけてくれるはずです。